

「ハズダ」の意味と用法 —意見文における使い方—

金子 比呂子
(1999.10.29 受)

0 はじめに

「名詞の性質をもちながら意味的に稀薄で、修飾要素なしでは使えない名詞」（益岡・田窪 1997 p.36）、いわゆる形式名詞としての「はず」については、『学研国語大辞典』（1986）に「当然そうなるような事情・状況・道理。予定。わけ。」と記載があり、以下のような例文が挙げられている。

- a 「きっと車に一ぱいの黄金が埋まっているはずだから 〈芥川・杜子春〉
- b 「血の池に沈められる事もあるはずはございません 〈芥川・蜘蛛の糸〉
- c 「あの時もう御姉様は、私が俊さんに差上げるはずの手紙をよんでいらしたのでしょうか 〈芥川・秋〉

このうち、aのように判断文の文末表現として用いられる「ハズダ」は多くの日本語教科書の初級後半に提出されているが、初級段階では定着しにくいものの一つである。おそらくハズダは意味・用法が多様で、母語で同じような機能を持つ言葉とのずれが大きく、語彙も限られている初級者には適切に使う自信がもちにくい上に、使う必然性もさほど感じられないからであろう。以下の初級終了段階の作文に見られた不自然に感じられるハズダの文に、そのことがうかがえる。

- ア 森さん（あなた）は日本語とか習慣とかいろいろなことを教えるはずです。
- イ もし勉強ばかりして趣味もなかったら、つまらなくて病気になるはずです。
- ウ 〈最終段落〉日本へ来る前と日本へ来てからの生活がもう変わりました。

来年、大学に入ったら、私の生活が変わるはずです。〈結びの文〉

また、さまざまな文末表現を習得した上で書く中級者の意見文には、他の類似表現との使い分けの難しさからか、やや不自然に感じられるハズダの文が出現する。不自然に感じられる文といっても、明らかな誤りを指摘できる文ではなく、実際の場面での使われ方と微妙なずれがあると思われる以下のような文である。

- エ 駅や車内でははっきりなしのアナウンスである。警告がなければ、事故が起こりかねない。だから、駅や車内のアナウンスは必要ははずである。

- オ なぜデジタル表示が全ての電車の中になのか。そうすればいいはずだ。

そこで、本稿では、主に新聞の社説、投書などの意見文に現れたハズダの用例からその最も基本的な意味・用法を確認した上で、小説の会話文からのハズダの用例も参考に、談話における機能、修辭的な効果も考察して、意見文を書く時など、どう使ったらよいか説明ができるよう、ハズダについて整理してみたい。

1 先行研究

「ハズダ」の従来の研究の蓄積はかなりのものであるが、その多くの先鞭となった寺村秀夫(1984)、寺村を継承して「ハズダ」を他の類似表現と比べた森山卓郎(1995)、日本語教育の観点から「ハズダ」の文を詳細に分析した池尾スミ(1970)を先行研究の例としてとりあげ、分析・考察の指標としたい。

1-1 寺村秀夫(1984)

ハズダの意味・用法を、寺村は「ある事柄の真否について判断を求められたとき、あるいは自分で判断を下すべき場面に直面したとき、確言的には言えないが、自分が現在知っている事実(P)から推論すると、当然こう(Q)である、ということを使うときに使われる」とし、なぜハズダを使うのかについては「自分の判断が、ある既知の(ひとつあるいは一連の)事実から推論すると当然そうなるのだということを言おうとする心理が働いている」と記述している。また、自分の推量ではなく、事実(P)があれば当然(Q)なる、そういう状況にあることを相手に伝える表現だという点で「ダロウ、マイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ソウダ、ヨウダ、ミタイダ、ラシイ、ソウダ」などのいわゆる概言的判断⁽¹⁾とは異なるとしながらも、ハズダの文はPが言われないことが多く、「ハズダは推論の過程そのものを述べようとするのでなく、ある「Q(ハズダ)」という自分の判断は、確言的な言い方はできないが、何らかの客観的な事実からの推論の結果のものだということを相手に印象づけようとする心理から出てくる表現」で「主観的な判断の概言的陳述である」という点は、概言の推量と同じであるという。

ハズダには「ある事実(Q)について、どうしてそうなのかと思っていたら、その疑問に答えるための他の事実(P)→Pならば当然Qだと了解される、そういう事実→を知った、という状況で使われワケダと言いかえられるもの」もあるが、「この用法の場合は必ず前後にPが現れている。あるいはそれが対話者に理解されているという状況がある」ということで、やはり中心的な意味は「ある事実があるから、その当然の結果として、Qだと自分は考える」と結論づけている。

1-2 森山卓郎 (1995)

森山は、上記の寺村を出発点に「ト思ウ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～ ϕ 」との比較という枠組の中で、ハズダを扱っているが、従来この種の研究では、「意味・用法の分析が「断定保留」「確信」「話し手領域外」などの「概念づくり」ないし「名づけ」になってしまう」「言語現象を整理して意味記述をする際に、抽象化した概念が必要なことも多いが、結局、どういうことかが今一つ明確になっていないと思われる」と問題提起し、「本稿では、どんな要因で我々が言語形式を選択し、認識を表現しているのかといったことについて、具体的言語現象に立脚しつつできるだけ明示的に検討することを試みた」としている。

この試みの具体的方法として、副詞テストを行っているが、ハズダの文にもともと確実に把握されていたが不確実になったような場合に使われる直接経験忘却タイプの副詞「確か」が共起することから、ト思ウ同様、「直接経験をしていても忘却したために不確実な主張しかできない場合も使える」と、未知推測しか表せないニチガイナイ、ダロウ、タブン+ ϕ などとの違いを明らかにしている。

ハズダ自体については「そう判断する論理的根拠があることを示す形式」としているが、「ハズダで直接経験を取り上げる場合も、自分の記憶をその根拠としている」という。そこで、ハズダは現実の事態のありようとは別に、論理的な根拠だけで判断することを表しているのではないかと考え、「ハズダは現実の徴候以外の「論理的根拠（判断理由）」により判断するということに重点がある、逆に言えば現場で得た情報を直接使わないという特性を持つ」と結論づけている。

さらに、典型的に考えられるハズダを使う状況の一つは、発話の現場状況が「論理的根拠による判断」と齟齬を来しつつあるような状況であること、またある種の認識上のギャップがあるという文脈で使われることが多いこと、そして現実認識との間に強いギャップがあるような場合は、直接間接経験で使う場合ともに、事実扱いを回避するだけのト思ウに置き換えられないことを指摘している。

1-3 池尾スミ (1970)

池尾は、「はず」の意義特徴を「話し手の客観的状況判断による論理的な推定（自然現象・社会現象・その場の状況に対する客観的・論理的な推定判断）・期待（ある事象の可能性に対する論理的な期待、社会通念として当然予想される期待）の意味を持つ。名詞性は極めて薄く、文末の断定辞の前に用いる「はず」は陳述に客観的状況判断による論理的な推定・期待・話し手の確信を強く示す相を

与える」と記述している。そして、そのハズダで受け止められ示される話し手の判断の前提となる条件・状況の捉え方に見られる特徴を考察した結果、具体的な形式として「ば・なら」、特に「ば」が他の接続形式に比べ主観的な要素が最も少なく、ある条件が具われば必然的にある結果が生ずることを期待や感情をぬきにして述べるものであること、「と・たら」と比べ時間性をもたず観念的な想定によることが多いことから結び文型「…はずだ。」に最も適合しているとした。

また、判断文の内容に注目し、その内容が、ある事象が生じる可能性とか人間の能力に関係してくると、論理的な判断からくる予測・期待となって示され、前件と後件に動詞の可能形や事象の生成に関するものがきやすいが、この期待性・可能性というものが、単なる客観的な状況判断からくるものでなく、社会的な取り決め・法律・義務づけ・道徳的な価値判断・勧告等に向けられた場合、「…はずだ」は倫理的な期待を表し得ないと独自の分析をしている。

したがって「はずだ」の場合は、道徳的な価値判断は入らず、人間社会における一般的な期待や推定を表すことになって、この点学習者の「はずだ」の使用には曖昧な点が多くなる。「その町には、人種差別は存在しないはずです。」には

- a 社会的な取り決め（法律その他）で決められている。
- b 社会一般に、それが当然であると思っている。自分もそう判断する。
- c 自分自身の価値判断からいって、そう信じたい。
- d そうあってはならない。存在すべきでないと思う。

のような多様な表現意図を想定できることになるのである。「これは、学習者の母国のことについてであるが、逆に日本の社会のことについて言う場合にも表現の選択を支えるもの、つまり社会のもっている判断の基準というか、考え方の類型のようなものがあると考えられる。」ハズダという判断文の背後に社会の判断の基準が前提として含まれているとは、この文の難しさを裏づける指摘である。

2 方法

2-1 データ収集の方法

ハズダの文を意見表明に有効に使うための知識をまとめることが、本稿の分析の最終目標であるため、特に1999年朝日新聞の社説・投書欄を中心に用例を集めた。また、新聞独特の文体的特徴なのか、ハズダの文の特徴なのかを検討するために、新聞以外に以下の小説等からの用例も参考にした。

- ・小説 高村薫『レディ・ジョーカー』上・下巻 1997 毎日新聞社（レ）

宮部みゆき『クロス・ファイヤー』上・下巻 1998 講談社(ク)

森博嗣『そして二人だけになった』 1999 講談社(二人)

・対談集『いま「いのち」を考える』梅原猛 河合隼雄 松井孝典

1999 岩波書店(いのち)

2-2 分析の方法

まずハズダの前にくる接続形に着目して大きくルハズダ、タハズダに分けた。新聞の用例のうち「動詞タハズダ」は24例、ダツク／デアツクハズダは3例、スギナカッタハズダ、ツラカッタハズダはそれぞれ1例で、100例を越えたルハズダ系、テイルハズダ系に比べて少なかった。先行研究からも明らかなように、ハズダが判断を受ける文末だとすれば、その前の時制にこだわるよりは、内容に着目すべきと考え直して、ハズダが受ける語彙に見られる傾向を基準に、文を分類することにした。その結果、「ナル(変化)ハズダ」系、「デキル(可能)ハズダ」系、「アル(存在)ハズダ」系、「タイ(感情)ハズダ」系といった類型を取り出した。

この類型に収まらないものもあったが、本稿では用例中最も目立った類型各々の意味と用法の考察を手始めに、ハズダの説明を考えていくことにした。

3 分析

3-1-1 ナルハズダ系

ハズダは「当然そうなるのだということを言おうとする」という寺村の指摘から、まずナルハズダをとりあげ、その用例に着目してみた。

- (1) こんなにも米軍基地の多い沖縄を見て、日本も国際平和に大いに貢献しているとみるのか、なるほどこれでは日本外交がおおむね米国の言いなりになるはずだと思うか、極端な話、ここはアメリカだと思われてしまうかどうか。「沖縄を見せる」小渕首相の心中はどこにあるのか、首相の思惑通りの日本像になるとは限らない。(論説4.30)
- (2) 食べたいと思うものは体が欲しているものなのだから、体にいいものだと思ってきた。「体にいいものを食べて来ていれば、それが欲しくなるはず。小さいうちから本物の味を知ることが大事なのね」(記事「こだわりの食卓」8.9)
- (3) 生まれてから、かかった病気、受けた治療の正確な記録を患者自身が持ち、医師に提示できるようになれば便利で、診断も正確になるはずだ。カルテ開示

の法制化先送りには、疑問を感じる。(投書7.9)

- (4)「プレミアム発泡酒」：今まで飲んでいた〈生〉と飲み比べてください。ひと口めで、その差が明らかになるはずですから。(CM3.29)
- (5)各企業、産業ごとに、労使でサービス残業の実態を正面から見つめ、段階的に削減する方策をさぐってはどうか。社会全体で見れば、それは、質上げのないワークシェアリング(仕事の分かち合い)となるはずだ。(社説5.1)
- (6)私はむしろ、学部レベルでは専門をなくし、全員が人文系の学問を学んでから専門の大学院に進むくらいでもいいと思う。現代社会の要請する、専門性と幅広い人間性を兼ねそなえるため、文学部は大きな拠点になるはずだ。(記事「実学一辺倒は誤り」橋爪大三郎3.25)

(1)は「なるほど」からも明らかなように、ワケダに置き換えられる、Q成立の背景P (P→Qの関係性)に気づいたという、気づき、納得のハズダである。

(2)(3)は、池尾言うところのハズダに最も適合する「なら、ば」という条件形が、前件として顕在している。しかしながら、ナルハズダ系は(4)(5)(6)のように「てください」「てはどうか」「てもいいと思う」といった何らかの提言、ないしは推進したい意見が前にあり、潜在的に「そうすれば」の意を含みつつ、ハズダの文につなげるといものが目立った。紙面の関係で全文を紹介できないが「{情報公開法を使いこなす力を養おう。} 行政のあり方を変える大きな契機にナルハズダ。」「雨水は効用がある。{墨田区ではためて生活用水にしている。} 地震や火事への備えにもナルハズダ。」「{日の丸、君が代の法制化について議論を深めよう。} みんなで議論を深めた上でこそ、建設的な合意は可能にナルハズダ。」「チマ・チョゴリを切られて日本社会に諦観を持ったが、その後多くの日本人との交流で、考えは変わった。相互理解を深め、広める中で状況は良くナルハズダ、と」もその例だと思われる。{ }内は筆者が書き入れた⁽²⁾。

条件形が顕在している(2)(3)にしても、ハズダの文が使われる背景には「小さいうちからいいものを食べさせよう」「カルテ開示法制化を推進しよう」という提言がある。提言が表明されるということは、現実にはそれが実現されていないということで、ハズダは、発話の現場状況が「論理的根拠による判断」と齟齬を来しつつあるような状況で使われるという森山の考察に合致し、実現が待たれる結果を受けるといことで、期待を表すという池尾の考察にも合致する。特に、意見文において、この構造は、～ナルハズダとして示唆される好ましい状況を確認させることにより、再び提言、意見を強く印象づけるという機能を持つ。

問題ありの現状。提言。(そうすれば)～ナルハズダ。 →提言。

(7)「信じられないというのなら、それでもいい。ただ、すばらしい機会だから、倉田かおりを注意深く観察してごらん下さい。この少女は能力者だ。僕には百パーセントの確信がある。倉田かおりのことをよく知るようになれば、石津さんも、僕の言葉を笑うことはできなくなるはずです。」(ク p.276)

小説からの(7)は「笑うことができなくナルハズデス」が相手に覚悟を迫る慣用句のようで意見文の場合と異なるが、提言が強調されている点は同じである。

3-1-2 変化ハズダ系

(8)この際、千葉県は埋め立て計画そのものを思い切って撤回すべきだと思う。そして、湿地保全の対象となるラムサール条約の登録地指定をめざしてはどうだろう。中途半端な計画にこだわるより、環境保全の旗を掲げた方が、国内外の評価は高まるはずである。(社説6.10)

(9){製品を修理して使い続けることだ。} こうして、製品の寿命を倍にすれば、製造に要するエネルギーのほか、工場が出す二酸化炭素やごみ、家庭や事業所が出す使用済み品は半減するはずだ。装置はできるだけ所有しない。機能はむだなく上手に使いこなす。それが、ごみゼロ社会への道である。(社説8.8)

(10){自給率を上げる決め手は、消費者の望む食料品を供給するように、国内の生産者が対応していくことである。} 双方が市場で情報を交換しあい、お互いの要求を満たし合えば、自給率は自然と向上するはずだ。(社説7.16)

(8)～(10)もナルこそ使われていないが、やはり好ましい状況への変化をハズダで示唆し、そのためには提言・意見の通りにするよう訴える流れとなっている。

提言〈ベキダ・コトダ〉。(そうすれば)／～ば、変化ハズダ。 →提言。

(8)は、提言がベキダの文を含んでおり、直接事態の改変を迫るベキダと、改変による好結果を示唆してベキダの文を強調するハズダの違いが明確に現れている。

(9)(10)は「ば」によって条件が顕在している。ナルハズダと比べて、変化動詞ハズダでは、動詞に細かい意味の違いがあるため、文の意味を明確に規定しよ

うとしてか、より条件の要求度が高まるようである。ただ、文脈の中でのハズダ文の機能という観点からみると、ナルハズダ同様、ハズダは「Pば、Q」の推論自体、特にその導出過程を受けているのではなく、「P（提言）。Pば、Q」で、むしろQのためにはPせよ、PすることがPにつながると論理の流れを遡及し、Pを促す働きをしていると思われる。また、QハズダのQが「良い結果」と、ある程度固定されているのであれば、Qより条件「Pば」のP、提言Pの方が情報性が高くなってそちらに注目を集められるということにもなる。

ハズダの前にナル、変化動詞がくるものをナルハズダ系として一応1グループにしたが、変化動詞の中に「生まれる」「生じる」や「終わる」「落ち着く」「解決する」⁽³⁾なども含めると、「動詞ルハズダ」の相当な部分をカバーするものとなる。さらに、やはり13例と用例の多かったデキルハズダ系も、今は不可能だが、将来は可能ニナルハズダ、デキルヨウニナルハズダの意味と解釈すれば、ナル（変化）ハズダ系の一種とも考えられ、ナルハズダ系はハズダの中心的なものと言うことができる。この観点から、次はデキル（可能）ハズダ系を考察する。

3-2 デキル（可能）ハズダ系

- (11) 中国や東南アジアの諸国に対し、「日韓」が地域統合の先取りにつながることを説明し理解を求める必要がある。両国経済の緊密化は、東アジアの政治的安定にも寄与できるはずだ。そのためにも、「日韓ブロック」の形成という誤解を招かないよう、心配りが欠かせない。（社説7.26）
- (12) {G8でコソボ地区の難民に救援策を！} G8の枠組みでなら、日本も自然な形でこの問題に関与できるはずだ。（社説4.6）
- (13) {新しい年に向け何らかの根本的な変換が必要。その変換の方策の一つとして科学が期待されている。} 科学の中に身を置くものとして、科学はその役割を果たせるはずだと思う。ただし、そのためには社会が価値観を変え、新しい「知」と「生活」をつくり上げようと決断することが必要だ。（論壇1.11）
- (14) 稲森和夫：知事の場合、理想的なスタッフを配して、予算の編成も行政も思い切ったことができます。

田中真紀子：東京の場合、そういう手腕が振るえないようなメカニズムになってしまっているのでは。機構が大きく、職員の数も多い。

稲森：それは変えられるはずです。問題は、当選した人が真の勇気を持っているかどうか。（討論「都知事にふさわしい資質とは」3.20）

(11)(12)のデキルハズダはまだできていないことを、提言に従えば将来的にはデキルヨウニナルと見越して、提言を印象づけるナルハズダ系の一種と言える。

アイディア・提言。(そうすれば)～デキルハズダ。→アイディア・提言。

だが、(13)はやや様相が異なり、まず科学が持っている可能性を示唆し、それに気づかせる。その後「ただし」と続けて、それを引き出すための条件を提示し、その克服を提言としている。(14)もまず可能性を強調し、次にそれが可能になることを阻んでいる「問題」を明示して、その解決を暗に勧めている。これは「当選した人が真の勇気を持って変えてください」という意味の提言となっている。

本来持っている可能性。 発現の阻害条件の克服／可能にするための提言。

(15)箱から出して、そっと足を入れるだけで何だか楽しい気持ちになってくる。靴にはそんな力があると信じています。あなたが探している一足に、ペダラはきつとなれるはずです。(CM3.24)

(16)「あれはどこに通じるドア？」

女は口をあわあわさせている。くちびるの端から白い泡を吹いている。

「しゃべれるはずよ、おふくろさん」(ク上 p.113)

(15)(16)は話し手が相手を特定して働きかけている文で、(15)からはハズダによる可能性の強調が「可能性に気づいてください。可能性を引き出してください。買ってみてください」と意味の展開を見せること、(16)からはしゃべるべきなのにしゃべらない状態にあることを非難して「しゃべれるはずよ」と相手に突きつけると「しゃべりなさいよ」の意味になるということがわかる。(15)と(16)からは、デキルハズダ系が、能力・可能性があること自体を強調する場合と、それが発現されていない現実を強調する場合とがあり、どちらの場合かによって、文の機能が変わることがうかがえる。

できるはずだから、やってみて。／やっていない。できるはずなのに。

(17)教務主任は、最近、通知表から教師の目が感じられないことが気がかりだ。「決まり文句でうまく書けばいいというものでもない。本当にその子をよくみ

ていれば、自分の言葉で書けるはずですが」(記事「学校」7.26)

(17)は可能性「自分の言葉で書ける」を「本当にその子をよく見ていれば」という条件付きで示唆している。(11)～(16)と異なるのは既に「通知表を自分の言葉で書けなかった、決まり文句で書いた」という事実があることだ。したがって、(17)は可能性があるにもかかわらず、可能性を生かしていない現実が強調されて、「自分の言葉で書けないのはその子をよく見ていないから」と命題の対偶が暗示され、すべきことをしていないと、非難のニュアンスを持つ文になる。

本当にVば、できるはずですが。→対偶：できないのは、Vないからです。

デキルハズダ文の機能を総括すると、まずものの「本来、そもそも」持っている潜在的な能力、可能性を示唆し、気づかせてそれが発現するよう努力を促す。ここで、能力、可能性の発現されていない現実を強調すると、どうしてそれが発現するように努力しないのかと、非難したり叱責したりすることになる。努力を命じることにもなる。逆に本来的な能力、可能性の存在を強調することによって、相手や自分自身を励ましたり、さらに、自分、知人の本来的な能力をアピールして、チャンスを与えてくれるよう頼むこともできる。

ただし、このようなデキルハズダの意味・機能の広がりも、ハズダの中心的な意味を基盤としていることには留意しておきたい。そこで、その中心的な意味だが、デキルハズダ系の考察から先の「将来ナツテホシイ状況ニナルハズダ」に加え、「本来デキルハズダ」を挙げておきたい。この話し手のもっている本来像と現実とのギャップが意味・機能の広がりと深く関わると思われる。

〈現実の状況〉	〈あるべき状況とのギャップの原因〉	〈機能〉
できない状況	できることを認識していない	気づかせ、励ます
できない状況	できるのに努力していない	非難・叱責
できなかった状況	できるのに努力しなかった	非難・叱責
できなかった状況	障害によりできなかった	無念に対する同情

上記の「できるのに努力しなかったためにできなかった状況」と「障害により予定が狂ってできなかった状況」で使われたデキタハズダ、デキルハズダツタの用例もいくつかあったので挙げておく。

(18) 病院側は事故後、「心臓病患者の肺にも、肺に疾患のある人の心臓にも軽い病変があった」と説明してきた。だが、審議会に提出された事故調査委員会の報告書によると、肺と心臓の「病変」は手術の必要がないことが、聴診などで十分判断できたはずだという。(社説4.2)

(19) {サンテグジュペリは} 三五年の年末、サイゴンまでの長距離飛行記録に挑戦した。高額賞金を手にできるはずだった。しかし二日目、自慢の最新鋭自家用機は、目的地はるか手前のアフリカに不時着した。(記事4.18)

「本来デキルハズダ」は「本来可能性がアルハズダ」とも解釈できる。この観点から、次のアル(存在)ハズダ系の考察を行う。

3-3 アル(存在)ハズダ系

(20) 「君、右側を見て。村役場か何かあるはずだから。そこから一キロほど行ったら、左側に入る道があると思うんだが……」(レ下 p.440)

(21) 「荷物の中に、ステッキがあるはずだ」(盲目の)彼は話を切り替えた。

「はい。すぐお使いになりますか？」私は聞いた。(二人 p.44)

(22) 「{暴走するシステムを壊すために} 爆薬を探してきます。それに、マニュアルがあるはずです」そう言うと、有佳は立ち上がった。(二人 p.276)

アルハズダ系には、自分の知識、記憶として、あるいは行為の結果として存在が認識されているから「たしか」アルハズダと言う場合と、「本来そもそも」それが存在すべきものだから「当然」アルハズダと言う場合があると思われる。

(20)の「村役場か何か」(21)の「ステッキ」は、話者が頭の中にある知識、記憶を根拠に「たしかアルハズダ」と推測しているので、前者の例であり、(22)の「マニュアル」は、装置には本来ついているべきものだから「当然アルハズダ」とその存在を確信している後者の例である。だが、「ない」現状において「アルハズダ」が探すという次の行為の引き金となっていることは両者共通である。

ない現状	たしかアルハズダ	よく見て	→探そう	探せ
	本来アルハズダ	よく考えて		

(23) {衆議院比例区の定数を五十削減する法案が提出された。} 削るべき無駄は、ほかにいくらでもあるはずだ。(投書6.24)

(24) 戦争を体験した方々にとっては、悲惨な過去を思い起こすのは、おつらいこ

と思います。でも、どうか私たち戦争を知らない世代に伝えて頂けませんか。そして、私たち平和な世代は知ろうとする意欲をもう少し持ってみませんか。私たちが知らないこと、知るべきことはたくさんあるはずです。(投書3.30)

(25)クリントン大統領は、沖縄でのサミット開催を歓迎しつつ、停滞している海兵隊普天間飛行場の移設問題を、それまでに決着させるよう強く促している。大統領にとって、沖縄訪問は基地の重要性を世界に向けて訴える絶好の機会ということだろう。それならば、基地問題に対する県民の思いを受けとめる義務も、同時にあるはずである。(社説7.21)

(24)は「～べきことがアルハズダ」となっているが、他にも同じような「米国の経験をそっくりまねする必要はないが、学ぶべきこともあるはずだ。」「企業、政府それぞれが、新たにすべきことがあるはずだ。」と、(23)「無駄があるはずだ」(25)「義務があるはずだ」もあった。(23)は「他の無駄の方を削るべきだ」、(24)は「戦争のことははじめもっといろいろなことを知るべきだ」、(25)は「義務を果たすべきだ」と直接行為を促す表現もあるのに、わざわざ「～(べきこと／義務)があるはずだ」と迂言的に表現している。特に意見文、論文では、知性に訴えて、気づきを促す方が修辭的に洗練されていると考えられるからか。

(26)「戦後の教育は、たしかに生き方や精神的価値を十分教えてこなかった。援助交際などを見ても、自分中心の風潮が支配的で、社会全体で共有する価値がない。しかし、だからといって、すぐ宗教に向かうことはない。憲法や人権を教えるなど、ほかにも方法はあるはずです。」(「宗教と教育」98.12.22.)

「方法がアルハズダ」は他にも一例、似たものとして、「手段がアルハズダ」、「道を探る余地はアルハズダ」もあった。

(27)落ち着いて……。とにかく、落ち着いて……。自分に言い聞かせる。何か良い手があるはず。(二人 p.226)

(27)は「何か良い手があるはず」という表現が良い手がまだ見つからないという現実を踏まえて「よく考えればみつかる、だから焦らずに落ち着いてよく考えよ」という意味に展開している。だが、(26)では、話し手はその答を既に見出ししており、「～など、ほかにも方法はアルハズダ」と敢えて提示することによって「一つの方法に固執せず、もっと柔軟に考えよ」と提言している。

(28)松井孝典：経済計画はいつでも成長率プラスを前提とします。なぜいつまでも成長しなければいけないのか。環境問題なんかを考えたら、現在の日本の不景気というのはある意味ではいいわけです。

河合隼雄：成長率以外の、面白い率がたくさんあるはずなのです。そういう率をもっと出して、成長はしていないけれども楽しいとか。(いのち p.174)

松井氏は現代の不景気を、ある意味ではいいと、独自の解釈をワケダで示し、河合氏は成長率こそ全てという風潮に抗して、深く考えればもっとおもしろい率があるはずだと、他の人にも気づきを促し、探してみるよう提言している。

(29) あれほどの人 {故江藤淳氏} でも、孤独だと知らされた。しかし、全ての命の存在には意味があるはず。私は悲しくて残念でしょうがない。(投書7.28)
意味がアルハズダはもう一例、ほかに理由がアルハズダがあった。

(29)は、自殺した人がいるという現実を前にして、命の存在というものは本来意味があるものだから、絶つべきではない、自殺すべきではないと訴えている。

アルハズダの用例からは「顕在していなくても大切なものに気づきなさい。掘り下げてもっと考えてみなさい。」「本来、そもそもあるべき姿ということを考えて、本来に立ち返りなさい。」という提言が発信されていることがわかる。

(30) {ベトナムのメコン川は存在感が大きい。} 日本の川も昔は生活の場として、活気があったはずなのに、最近では遠い存在になっている。(記事5.30)

(31) {生徒の自己決定による選択の重視は教育を私的幸福の追求の道具にしていくのではないかという懸念がある。}「普通教育には本来、市民を育てるという目標があったはずなのですが」(記事「よい教育?」5.12)

(30)(31)はアッタハズダの例であるが、両者に「昔」「本来」という原点回帰を促すかのような副詞が現れていることは興味深い。アルハズダと基本的には同じタイプの文だが、アッタということでは今は失われているということがより明確に示され、両者ともに「なのに」「なのですが」と逆接の接続助詞につながっていく。ハズダの前は状況がくることが多いので、他の動詞のタ形を受けるタハズダも後ろに逆接の接続詞、接続助詞が続くアッタハズダのタイプの文が多かった。

3-4 タイ(感情)ハズダ系

「～たい」は自分のことしか述べられない感情形容詞、感覚形容詞に連なるものだが、様々な概言的判断を表す形式の中でハズダを使う必然性は何なのか。

(32) {栄養食品とヨーグルトしか食べない子供。} 本来なら、その子の年齢は、ご飯をぼろぼろこぼしても自分でやりたいはず。親が食べさせようなんてしたら、かんしゃくをおこす。でも、その子は、ヒナ鳥みたいにただ口をアーンと開けてヨーグルトを待つだけ。(記事「子育て音痴」5.12)

(33) {ヨーコ・ゼッターランド} 二年前、日本に戻り、Vリーグに復帰。昨年、優勝を果たした。外国人枠の撤廃は、それだけにショックだった。母親の方も「選手は体がだめになるまで、現役を続けたいはず」と同情する。(8.2)

(32)には「本来なら」が頭在しているのでわかりやすいが、子供のもつ本来の欲求をハズダで受けて、それが生かされていない現実の状況を問題として提起している。現実の状況を本来あるべき状況からの逸脱とたしなめ、本来に戻れと働きかけるニュアンスも読みとれる。(33)も「選手というものは、体がだめになるまで、現役を続けたいものだ」という選手の本来的な願いと、それとは逆の境遇に置かれたヨーコの現実とのギャップを強調して何とかならないかと訴えている。

つまり、タイハズダを使うと、その願い、その欲求は本来的なものであるということが強調され、それが生かされていない現実の含み持つ問題がクローズアップされるというわけである。こうしてみると、このタイプの文もやはり現実と本来あるべきものとのギャップを意識して発せられていると言える。

3-5 その他のハズダ文

実際に用例を集めてみたところ、ハズダが受ける動詞に特徴があったため、その特徴によって、ハズダの文を考察してきたのであるが、新聞の特に社説に最も多かったのが「少なくないはずだ」であった。社説の特殊な文体というべきものかもしれないが、付記しておく。(34)は文章の冒頭に、(35)は最後にでてきた。

(34)「こんな状態になる前に、なぜもっと早く診せにこなかった」病気にせよ、けがにせよ、医者に諭された経験を持つ人は少なくないはずだ。(社説4.7)

(35) {外部の視点を持った社外取締役の導入は悪くない。} 一線から退いた人たちのなかには、体力も気力も十分で、的確な能力を持ち合わせた人物も少なくないはずだ。(社説7.5)

4 結論

文末をダにしないでハズダにすると、実質名詞「はず」が弓矢、矢筈を語源とし、筈と弦の合致という意味を持つからか、ハズダであるべき状況、あってほしい状況が提示されると同時に、それとはかけ離れた現実の状況が含意される。そのギャップの大きさ、質によってハズダ文の言外の意味、機能が生まれてくる。

下記は、今回の考察をもとに、想定した状況と現実のずれの間でハズダがどのように使われているか、どのように他の類似形式とすみ分けているのかを図式化

してみたものである。

本来あるべき 状況	ハズダ モノダ	現実：問題あり	将来なっしてほしい 状況	ハズダ ワケダ
--------------	------------	---------	-----------------	------------

～トイウモノハ モノ ← 回帰 変化→ (PバQ) コトニナル
～ハ/ナラ ハズ Qデキルヨウニナル
原点を認識させる 努力を求める 条件・提言を印象づける
よく考えて道を探せ ベキダ・コトダ 提言のとおりによせよ

* 適切な警告があれば、事故は起こらないはずだ。(条件の強調：働きかけ)
だから、駅や車内のアナウンスは必要なわけだ。(納得：自己完結的)

** 選手というものは、体がだめになるまで現役を続けたいものだ。(般化)
(一流の) 選手なら、体がだめになるまで現役を続けたいはずだ。(共感)

なぜハズダを使うのか、その必然性を明らかにするにはさらなる分析、考察が必要であるが、特に意見文において、何のためにハズダを使うのか、その使用目的は多少明らかになったと思われる。さらに、先の図式をもっと緻密なものに上げるべく、分析、考察を続けたい。

5 今後の課題

収集したデータはかなり多かったので、本稿では意見文にでてきた用例に限らざるを得なかったが、今後シナリオ、一般会話などに出てくるハズダについても考察を行い、会話におけるハズダの機能の広がりも明らかにしたい。また、今回は冒頭の『学研国語大辞典』の「a. ハズダ」だけを分析の対象としたが、今後「b. ハズハナイ」、「c. ハズノ名詞」についても分析していきたいと思う。

注

- (1) 寺村 (1995 pp.223-60)
- (2) 用例は文脈から切り離して提示するため、時には意味的な補足が必要となる。したがって、そのような補足を加える場合には { } で囲むこととした。
- (3) 奥津 (1996 pp.82-90)

参考文献

- 池尾 スミ 1970 「判断辞のように用いられる形式名詞－『はず』とその周辺」『日本語と日本語教育』第2号 慶應義塾国際センター
- 奥津敬一郎 1993 「変化動詞文その三 変化動詞文の種類」『日本語学』第176号
- 寺村 秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 益岡隆志 田窪行則 1997 『基礎日本語の文法』くろしお出版
- 三宅 知宏 1995 「ニチガイナイとハズダとダロウ」『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版
- 森山 卓郎 1995 「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～ ϕ 」『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版
- 森田 良行 1980 『基礎日本語2』角川書店

A STUDY OF “HAZU DA”

KANEKO Hiroko

The purpose of this paper is to describe the meaning and functions of *hazu da* by analyzing sentences which end in *hazu da*. In order to illustrate the actual usage of *hazu da*, sample sentences end in *hazu da* from the editorial section or essays of the Asahi Shinbun

are studied.

Therefore P (proposition) *hazu da* type of sentences are divided into 4 varieties with special attention given to what ending of proposition precede to *hazu da*, which are as follows;

- 1) *~naru hazu da*
- 2) *~dekiru hazu da*
- 3) *~aru hazu da*
- 4) *~tai hazu da*

Sentences end in *hazu da* tend to be preceded by state or condition, which should be realized, but is not in the real world. The gap between the real state and the preferable state is emphasized by *hazu da*, so P *hazu da* is to have some functions such as sympathy, encouragement, remonstrance and blaming depending context.